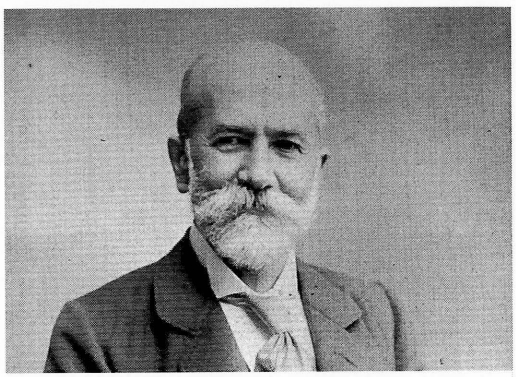
フェレンツ・ホップ東洋美術館における日本美術

エバ・チェ


フェレンツ・ホップ

フェレンツ・ホップ東洋美術館は、ハンガリーで最大の東洋美術品を所蔵している。約20,000点の美術品からなるコレクションのうち、7,000点以上が日本美術品で、これは中国美術品に次ぐ大きなコレクションである。

同美術館は1994年に創立75周年を迎えた。コレクションの基礎となっているのは、美術館の名付け親であるフェレンツ・ホップの蒐集した4,000点以上の個人コレクションで、遺言によって国が相続したものである。ホップは、自分のコレクションの将来について、公的な美術館が相続するように、すでに1910年に遺言の中で書いている。当時は、国立美術館と国立工芸美術館、そしてハンガリー国立博物館民俗学部の三機関がコレクションを分割して所有することになっており、どの館が何を所蔵するかという選択権は、まず国立美術館にあった。ところが、彼は死（1919年）の少し前に遺言を書き直し、コレクションを一括して保存することにした。彼の言葉を借りれば、「私のコレクションの大部分を占める東洋の美術品（中国、日本、インド）は、一つの独立した東洋美術館を創立する基礎としてふさわしいものであり、また、文化教育という目的のために一般公開すべきだと、その後確信するようになったから」である。実際のところ、彼の住んでいた邸宅は彼の存命中、すでに本物の小美術館と言えるほどのものであったが、石像や石造りの仏塔を配して東洋風に改造された庭に囲まれた邸宅も、死後、国に残された。

フェレンツ・ホップ（1833-1919年）は、現在のチェコ南部モラヴィアにある小さな町フルネクで生まれた。13歳の時ペストに上京し、親戚の推薦を受けてペストのカルデローニ光学会社に徒弟として就職した。徒弟期間を過ぎると、さらに修行を積むため数年間外国生活を送り、ウイーンやニューヨークで働いた。その間、1858年に彼が遭遇した第一回目の日本使節のニューヨーク到着は彼にとって忘れがたい事件となった。帰国後、1861年にイシトバン・カルデローニの共同経営者となり、1864年からは同社を単独で所有することとなった。彼は事業で高い名声を獲得し、彼の会社は1872年から学校の視覚教材や学習教材の製造・販売にも乗り出し、事業を拡大していった。生涯、旅を好み、多額の資産を所有していたことから、人生の後半に世界周遊旅行に幾度も出かけ、ほとんど世界中を回ることができた。旅の間1,000枚以上もの写真を撮影したが、残念ながらそれらは現在まで残っていない。1882年から1914年にかけて、五回ほど世界一周旅行をし、その間、日本を三度訪れたが、その日本旅行ほど大きな喜びをもたらしたものはなかったと、彼は手紙に書いている。日本の工芸品の傑作の数々は彼を魅了してやまなかった。とくに、作品の繊細さや、精巧な出来ばえを高く評価した。旅の連れ連れに買い物をするようになり、最初は記念品を買うのみだったが、それが後には本格的に美術工芸品の購入にあたるようになり、東洋美術の熱心なファンとなった。彼は、東洋美術の専門家ではなかったが、美的感覚に

とりわけ優れており、自分の楽しみとして、もっぱら美術工芸品ばかりを購入した。それは、彼がこれらの工芸品の方が芸術的価値を判断しやすいと考えたからだった。彼の購入した品物の大部分は時の試練を越えて生き残るに値するものということがわかった。彼は、ヨーロッパの美術商からも品物を購入したが、日本でも展示会や日本人の美術商、さらにハンガリー系のマーチャーシュ・コモルからも様々な品物を買い取った。その当時、クン・アンド・コモル美術商会は、横浜と、神戸、香港、上海、シンガポールに店を構えていた。

1,800点の日本美術品からなるこのコレクションには、美術館の創設後、他の公共コレクション、たとえば国立美術館のヴァイ日本コレクションや、国立博物館民俗学部所蔵の東洋美術品の一部が加えられた他、国立工芸美術館からも、1919年以降数回にわたって、ホップ美術館に美術品が移管されている。

上記の公共コレクションは、ヨーロッパの他の博物館や美術館と同様に、すでに19世紀末期から、ヨーロッパ以外の美術品にも蒐集範囲を広げようとする努力を意識的に行っていた。極東の美術の中でも彼の興味を特にそそったのは、当時最新の美術にきわめて大きな影響を及ぼしていた日本美術だった。

ブダペストの国立美術館でも、一流のコレクションならば日本の美術品を所有しないわけにはいかないと考えるようになっていた。そのような折り、1907年にペーテル・ヴァイが、日本美術を概括できるような小コレクションに値する美術品を、現地に滞在して選ぼうという話を持ちかけてきた。この話は、特に絵画と木版画のコレクションからなる日本コレクションの設置のための良い機会となるように見えた。ヴァイの申し出は受け入れられ、20,000コロナという予算枠で美術品を購入することが委託された。この程度の金額では、わずかばかりの優れた作品しか購入することができなかったため、むしろ広くこの分野全般を包括することができるような、大部分は19世紀に製作された、あまり有名でない作者の作品が購入された。品物の一部は、彼もクン・アンド・コモル美術商会から入手したものと見られる。この時、彼の購入した美術工芸品は2,300点以上にのぼり、約300点の絵画、170点の木版画本、約1,100点の木版画、11体の仏像、そのうちのいくつかは初期のものも含まれていた。そのほか、700点以上にのぼる金属製品、漆器類、根付けなどもコレクションの値打ちを高めることになった。国立美術館の「日本室」では、1908年からこのコレクションに所属する約600点が常時展示されており、この展示品のカタログも作られている。1919年には、新しく創設されたホップ美術館が国立美術館の管轄下に入ったが（1935年まで管轄下にあった)、その際、ヴァイ・コレクション全体がホップ美術館に移された。

貴族出身の修道院長ペーテル・ヴァイ伯爵（1864-1948年）は、後にはローマ法王の最高記録官、名義司教となり、バチカンから委任されて、東アジア諸国の布教活動を査察するために幾度も現地を訪れた。日本にもしばらく滞在したが、彼の旅行記[1]によれば、彼は日本にもっとも興味をひかれた。日本滞在中に経験した日本の急速な発展に驚嘆の念を抱き、世界政治における日本の重要性の増大を的確に認識した。日常生活のあらゆる分野や社会全般にわたって広く浸透している芸術的美学の影響を高く評価した。作品の持つ精神性、すなわち彼の表現を借りれば、「主観的な美術感覚ならびに芸術理念」、作品の哲学的背景を理解し、またそれを一般に理解させることが、彼が日本美術に傾倒した主な動機であった。東洋美術の解釈や普及のために広く執筆活動を行い、著作を著した。[2] 彼の熱意に溢れた文章は、それぞれのテーマに関する深い学術的な知識には欠けており、また多くの資料的な誤りや先入観に満ちているにもかかわらず、当時、多くの日本美術に対する信奉者を生み出すことに貢献した。

1872年に創設された国立工芸美術館は、ヴァイよりも早い時期に東洋の美術品の蒐集を

始めた。同館は1896年に独立した建物を獲得したが、それはハンガリー・アールヌーボー建築の代表的な建築物である。独立した建物の獲得を機会に、他の美術館に保管されていた東洋の美術工芸品が同館に移された。それ以前の1880年にはすでに、ジャーナリストで旅行家のアッティラ・セメレ（1859-1905年）が1869年頃日本で購入した180点の櫛のコレクションを買い取っていた。同館は、万国博覧会（1873年ウイーン、1878年パリ、1889年パリ、1900年パリ）には必ず参加し、美術品を購入した。1900年のパリ万博では、20点の明治時代の美術品を購入したが、その中には入賞した作品もあった。たとえば、銀賞を授賞した荒木寛畝の孔雀を描いた大形の絵や、米原雲海の男子の小さい木彫などである。1911年にロンドンで開催された日本博覧会の展示品は、ブダペストでも1912年に公開され、大成功を収めた。国立工芸美術館は、そこで展示された作品のいくつかを購入したほか、数多くの作品が個人の蒐集家から入手された。東洋関係の美術品の一部はすでに1919年にホップ美術館に移管されている。

第一次世界大戦後には、東洋の美術品を多く含む遺品が国立工芸美術館の所有となった。1948年には、陶磁器の研究者であるヴィンツェ・ヴァルタ教授（1844-1914年）所有の陶磁器の歴史と、その製作技術を紹介する数千点にのぼるコレクションが、ブダペスト工業大学から同館に移管された。獣医大学の退官教授であるオットー・フェッティク博士（1871-1954年）も、1947年から1953年にかけて三度にわたり、卓越した美術感覚で購入した数千点の美術品を、国立工芸美術館に対して寄贈した。上記二つのコレクションに含まれていた東洋の美術品はホップ美術館が収蔵することとなった。特に、フェッティク・コレクションに含まれる19世紀から20世紀への転換期に製作された陶磁器は、すべて傑出した名品である。ホップ美術館の創設にともなって、当初はハンガリー国立博物館民俗学部として機能しており現在でも東洋コレクションを収蔵している国立民俗学博物館から移管された美術品も多くある。その中には、元横浜総領事であったアラダール・フレッシュのコレクションに所属していたものや、ヤーノシュ・クサントゥシュ（1825-1894年）の東洋探検旅行（1869-1871年）の際に集められた美術品の一部も含まれている。クサントゥシュはアメリカ合衆国に長い間滞在し、ハンガリーへ帰国後は植物園と動物園の園長を経て国立博物館民俗学部の部長となった。

上記の他にも幾人かの個人蒐集家の遺品や寄贈品によって、ホップ美術館のコレクションは豊富になっていった。その中でも個人蒐集家として名高いのは、船医のデジュー・ボゾーキ（1871-1957年）で、彼は1900年から1908年にかけて東アジア海域で勤務し、この航海に関して本を著した。また、アウレール・ガースネルも、ジーメンス社の主任技師として1907年から1912年の間東京で勤務し、美術品の蒐集を行った。

芝増上寺の徳永を訪れたガースネル・アウレール

ホップ美術館の館長としてコレクションを二十年以上にわたって一人で管理していたのは、ゾルターン・フェルヴンツィ・タカーチ教授（1880-1964年）であった。彼がまだ国立美術館の館員であった頃、ヴァイの購入した日本の美術品の目録を作成する仕事を任されたが、その仕事をきっかけとして日本美術に興味をもつようになった。彼は、ヴァイを直接知っていただけでなく、ホップの個人的友人でもあり、また専門的なアドバイザーでもあった。ホップ美術館が名実ともに真の東洋美術館となったのは、ひとえに彼の業績に負うものである。1923年はフェレンツ・ホップの生誕90周年にあたったが、この年、ホップ美術館は、大きく膨れあがったコレクションから精選された約1,570点の美術品の常設展示に踏み切った。両大戦期間の経済的に限られた環境の中で、大規模な購入活動はできなかったが、それにもかかわらず、タカーチは自身の豊富な専門知識に基づいてコレクションを整備・発展させ、不足を補うための努力を惜しまなかった。彼は東洋に居住するハンガリー系の美術商達とも良好な関係を保持していたが、その中の幾人かは同美術館に対して惜しげもなく美術品を寄贈した。タカーチ自身も、1936年の極東への研究旅行に際して数多くの美術品を購入している。(3)

ホップ美術館は、組織的には1948年から国立工芸美術館に所属することとなったが、業務上は独立した地位を保持している。1948年から1972年までティボル・ホルヴァート(1910-1972年)が、自身の死に至るまで館長の任にあった。彼は、日本に6年間滞在したが、同美術館には彼の個人コレクションからも多くの美術品が収蔵されている。

同館の日本コレクションは、第一にコレクションの成立に大きく貢献した蒐集家の美術趣味、興味の対象、知識の広さや深さによって特徴づけられている。当初見られた収蔵品の不均等な構成は、その後の意識的な整備・発展によって釣合のとれたものとなった。美術蔵品の中の日本美術品の多くは江戸時代のもので、彫刻や絵画、木版画のほかに、あらゆる種類の工芸品も大きな割合を占めている。

仏教美術

仏教美術関係の彫刻や絵画のコレクションの多くは、ペーテル・ヴァイの購入したものであるが、その規模はあまり大きいものではない。いくつかの古い彫刻の中には、奈良時代の乾漆菩薩像や、平安末期の釈迦如来坐像、鎌倉時代の阿弥陀如来立像、室町時代の菩薩坐像があるが、それ以外はすべて江戸時代のものである。江戸時代の作品の中には、大多数がホップ自身の購入による40体余の厨子入仏像も含まれている。主として18世紀に製作されたこの厨子コレクションには、図像学上きわめて興味深く希有なものも見られ、その重要性は高い。

絵　画

絵画の大部分、400点弱は、いくつかの古い仏教絵画と室町時代末期の一、二点の水墨画（狩野周徳「竹雀図」など）を除いて、江戸時代後期のものである。狩野派の作品といっても、一、二の例外を除いて主に狩野派後期の絵師の作品である。コレクションの中で最大の数を誇るのは、あまり知られていない19世紀の南画絵師の作品であるが、中には比較的有名な谷文晁の作品も数点収蔵されている。住吉派に属する絵画は少ないが、その中でも17世紀末から18世紀の源氏物語の場面を表したミニチュア絵画の画帖は傑出した作品である。この画帖は画家のジュラ・トルナイ（1861-1928年）が日本滞在中に贈られ、後にホップ美術館に寄贈したものである。

明治時代の絵画では、荒木寛畝の大形で装飾性の高い「岩頭孔雀図」の絵と小林清親の

神話をテーマにした「彦火火出見尊図」を描いた絵画が代表的なものである。

木版画コレクション

木版画コレクションはヴァイが今世紀初頭に選んだものであるが、年月を経て1,500点に膨らんだ。著名な絵師や流派の代表総ての作品が、バランスよく集められているわけではないので、日本の木版画の歴史全体を概観するのに充分な、釣合のとれた構成にはなっていない。それにもかかわらず、初期の絵師や後期絵師の作品も収蔵されており、木版画の発達史を紹介することは可能である。鳥居派に所属する絵師では、二代目清信、清広、清長、清峯の作品があるほか、勝川派の絵師達の作品、喜多川歌麿およびその弟子達の作品も収蔵されている。木版画の大部分は19世紀、江戸末期のもので、明治時代のものはそれより幾分少ない。この時代を代表する流派は歌川派であった。当コレクションの大部分はこの派の絵師達のもので、初代豊国、国貞、広重、国芳などの作品であるが、その他に30点程あまり有名でない絵師達の作品もあり、歌川派の作品をほぼ完全に網羅している。上方もしくは大坂地方の作品も収蔵されているが、流光斎如圭、北州、北英、長秀の作品が一、二点、後期のものでは、広貞、国員、宗広、芳豊の役者絵がある。明治期の作品では、豊原国周、橋本周延、水野年方、尾形月耕などの作品が数多く収蔵されている。また、日清戦争、日露戦争に題材をとった作品も何点か存在する。

漆器と根付

約1,000点からなる漆器は、数の上でも質の上でも日本美術コレクションの中で価値の高いものに属している。収蔵品はすべて江戸時代後半および明治初期の作品であるが、あらゆる種類の漆器が見られ、その中にはあらゆる漆芸技術と豊富な装飾モチーフを駆使した約200点の印篭がある。日本の漆器はホップのコレクションの中でも際だった地位を占めており、そのほとんどを彼自身が購入している。特筆に値するのは、約500点の根付けコレクションで、その3分の2はホップ自らが購入した。これらは例外なく優れた作品である。数は少ないが価値の高いコレクションがジュラ・ビシツにより同美術館に寄贈された。根付けコレクションはこの日本の典型的な小像芸術に関して格好な概観を提供している。これらの小さな彫り物は、当初からヨーロッパやアメリカの蒐集家の好むところとなり、現在では日本よりも海外の方が残されている数が多い。収蔵品の中には18世紀の作品もあり、また京都、大坂、江戸派の作品もある。銘の入った作品では、友忠、正直、岡友、岡佳、蘭亭、我楽、舟山、光広、正次、出目右満、三輪、秀民、舟月、友親、法実、岷江、為隆、一貫、豊昌などの作品が収蔵されている。

陶磁器

1,000点以上の作品を数えるコレクションの大部分は、肥前—有田焼きの輸出用陶磁器である。そのほとんどが18世紀以降のものであるが、17世紀後半の作品もいくつかある。約150点にのぼる明治時代の薩摩焼きや京都磁器はこれら輸出用に製作された装飾陶磁器の一流品である。茶器のコレクションも数は少ないが含まれている。

その他

ホップは比較的大きな象牙の彫刻の置物を好み、熱心に蒐集した。これらはヨーロッパの影響がみられ、外国人好みに合わせようとしているが、中には名品も含まれており、当時の人々の暮らしや習慣を知る上でも興味深い作品となっている。

さまざまなブロンズおよび他の金属製品、七宝焼の品物も数多くある。花瓶、線香立て、儀式用品、日常の生活用品などがこの中に含まれている。製作時期はすべて江戸および明治期である。西洋美術の影響を受けた、19世紀から20世紀への転換期に制作された大小のブロンズ像コレクションも、数は少ないが存在する。

ホップのコレクションには、刀、刀身、短刀、刀の付属品（鍔、縁頭、小柄、目貫）も含まれている。ヴァイの購入した数百にのぼる鍔と小柄によってこのコレクションの価値は大いに高まったが、それはこの美術部門を包括的に見ることができるからである。

さらに、小さな織物コレクションも言及するに値するであろう。このコレクションによって、さまざまな材質、機織り技術、装飾方法を紹介することができる。

現在、ホップ美術館では二階が展示室、一階が図書室となっている。1950年に国立工芸美術館の所属となったジョルジュ・ラート美術館は、1954年以来、日本美術および中国美術の展示館となっている。東洋コレクションの収蔵庫は、国立工芸美術館の建物内に置かれている。

（ハンガリー語訳　佐藤紀子）

（脚注）

(1) Gróf Péter Vay: Kelet császárai és császárságai「東洋の皇帝と帝国」
ブダペスト　フランクリン出版社　1906

(2) Kelet müvészete és müizlése「東洋の美術と美術趣味」
ブダペスト　フランクリン出版社　1908

(3) Zoltán Felvinczi Takács の多くの著作の内、A Kelet Müvészete「東洋の美術」
Barát-Éber-Takács: “A müvészet története”『美術史』より
ブダペスト　ダンテ出版社　1934
研究旅行の旅行記: Buddha útján a Távol-Keleten. I - II
「極東のブッダの足跡を訪ねて」１－２巻
ブダペスト　レーヴァイ出版社　1938

自宅の東洋風庭園に佇むフェレンツ・ホップ
（現フェレンツ・ホップ東洋美術館庭園）